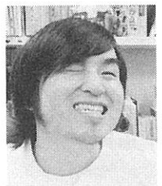


ゴガン

K02030　片桐　明生

1．海の実態

広さは地球の表面積約５億１千万平方キロメートルに対し、海の面積は３億６千万平方キロメートルあり、70.8%にあたる。そして、海の深さの平均は3800mで、これに対して陸の高さの平均は840mしかない。仮に陸地を削って海を埋めたとしても、海は350メートルほど浅くなるにすぎない。このように、小さなかたまりに陸地に６０億人もの人間がむらがって生活しているのである。

人類が海を利用しはじめたのは１万年以上前であろう。しかし、長い間の利用は表面上のものがほとんどであった。海の中まで利用するようになったのは最近のことであるといえる。

2．問題提起

日本は周囲が海に囲まれている。そのため、気候が温和であり、雨が適当に降る島国となっている。また、この地理的条件により、外国からの侵略を防ぎ、そして経済力増強をも助けた。しかし、日本人はこれらについての意識が弱い。日本人が海をわすれてしまっているのである。仕事として水産業や船の関係に携わっている人、または趣味で海の釣りやサーフィンなどを楽しむ人は海のことが頭から離れない。しかし、海に関係ない人、特に都会に住む人の中には、海の存在を忘れている人が多い。このような人は無意識のうちに海を汚す行為をするかもしれない。日本には自然が多い。そのことを頭の片隅に追いやることはしてはいけない。

最近の３～４０年間の世界の動きは、とくにエネルギーを多く使って経済を発展させる方向に進んできた。しかしエネルギーの大量消費の結果として、地球環境が非常に悪くなった。各地に酸性雨が降って農作物や竹林に損害を与えたり、あるいは急速に砂漠が広がったりしていることなどが具体的な例である。この状態がこのまま進むと、人間が住む地球の環境が大きく損なわれることになる。現在でもつづくエネルギー乱用時代には、海は被害者であるのだ。

今後、クリーンな海洋エネルギー発電するなど海に頼ることが多いと思われる。すべての生物のための海を維持していくために意識を改革する。

3．提案

現在の港湾・沿岸設備は、親水意識を高めることだけの開発が多い。表面上の海をみることでは本当の空間というものを理解できないのだと思う。海の内面に潜ってこそ、その現状がどうであるかを見てから、理解ができ、人と海の関係をつめていくのだろう。

サーフィンや、海水浴、釣りといった表面としての、使い方だけでなくて、スキューバダイビングのような水の中に深くまでもぐりこむ、いわば疑似体験のような空間を直接問いかける。ダイビングを行うときは、海水がきれいで透き通っている場所へ行きたいと希望する。それはまた、海の中を見ることにあたって、その空間が神秘的かつ清純なものでなければならない。日常ではなく、非日常へのアプローチとしてある行為であるわけだから。そして、海の質を考え直すためには、その中に潜りこみ体験することで理解できるだろう。海の美しさを保つために、最大限の注意をする。海水浴場・釣り場などに、ゴミが目立つことがあるが、それはレクリエーションの妨げとなる。

また、もともと人間は空気の圧力が大気圧、すなわち１気圧の状態で生きてきた。陸上の生物は、この圧力が過ごしやすいようにできている。圧力の高くなるダイビングを行う際には、それに必要な知識とある程度の経験が必要となってくる。しかし、この場はそのようなものを必要とせず、訪れたいときに訪れ、経験や知識を問わずに非日常に誰にでも入れる空間をつくりだす。

指導教員　伊藤　洋子　教授

4．敷地説明

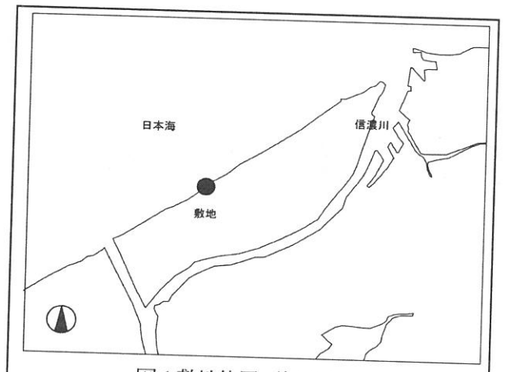


図１敷地位置（新潟市）

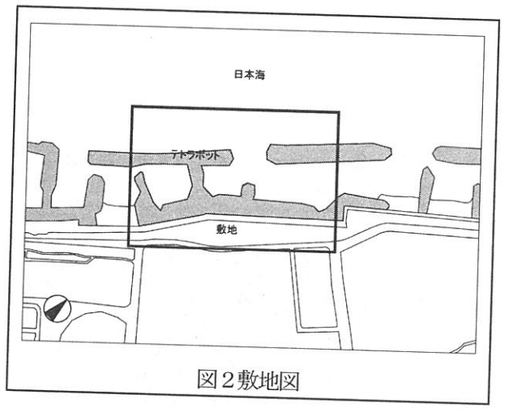


図２敷地図

新潟県新潟市沿岸。日本海側でこの地は現在、テトラポットで囲まれている。暫定的な護岸の配置で、陸と海の係わり合いを断絶し人を拒絶する箇所となってしまっていると思われる。海のそばにありながら、このような一方的な利用はありえないと思う。新潟は海に恵まれているのではあるが、この地において利用の点については、無いに等しい。あるとすれば怖いものみたさで、不用意にテトラポットの上に上っていく人だけだ。人と海との歩み寄りを行う中で、護岸（テトラポット）というものはひどく単一な用途であり（偏った）人の視覚のなかのでは、海と陸のつながりを再確認するところでは最適であると思う。

近隣には私立・公立の大学や高校が多く点在し、学生が近づきやすい環境にある。

5．コンセプト

単純な形の連続ではあるが複数個使うことにより、水・空気の入り混じり、そして海の中をまるで泳ぐような感覚で自由自在に動き回れることが出来る。いわば、ダイビングをするときにウェットスーツを着てからそして、その空間の陸上と違う点は、聴覚効果である。常にかざなみによって作り出される、自然の音を聴くことが出来る。また、ときには、強い風により、発生する大きな波が海岸に押し寄せるとき、自然の強さ、恐ろしさを感じることが出来るだろう。

この空間でさまざまな身体行動を行うことにより、海の中での体験をアクティブに行える。体を動かし続けている間にも、かざなみの音は聞こえる。そこは、海であるということには変わりないのだから。

大多数の人々の生活にはこの領域を組み込まれていくものではない。ただ、平均的な生活をするうえで、この空間を捻じ込みいれることにより、どのように評価するかというのは、人それぞれであるが、現状の海はどうであれ、それをどのように使っていくべきかということを再認識するであろう。

しかし、海は世界に向かって拡がっている。海は広く、大きく、明るく、力強く、ときには厳しく、そして限りなく美しくなければならない。

この計画は、この敷地だけという限定ではなく、これをパターン化して、海の認識度が低い場所や、海の存在を忘却してしまっている日本のさまざまな地域に、設置することにより、日本の周辺の海の全体を意識を網羅していきたい。

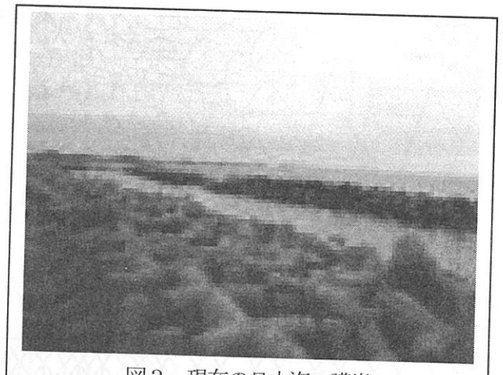
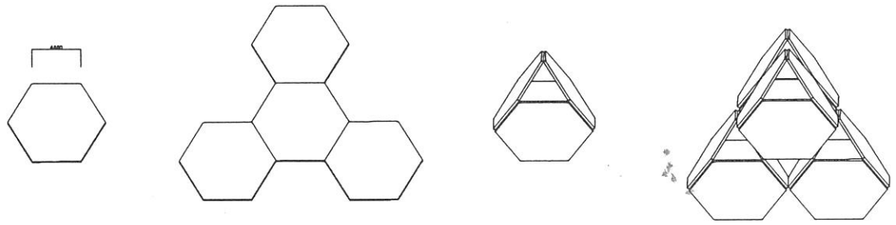
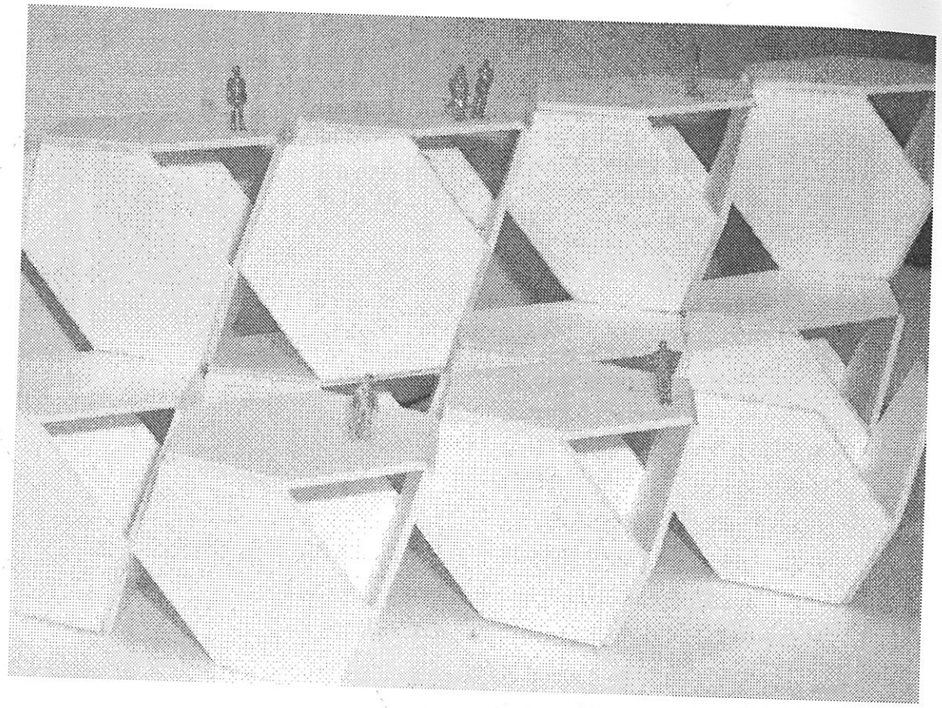


図３．現在の日本海の護岸

structual design



生態系の中で、正方形や長方形はほとんど存在しない。　蜂の巣や亀の甲羅など、四角形より六角形のほうが多く存在している。その形を構造物と考え、組み合わせにより水中の中に耐えうるものをさらにくみあわせた。



siteplan

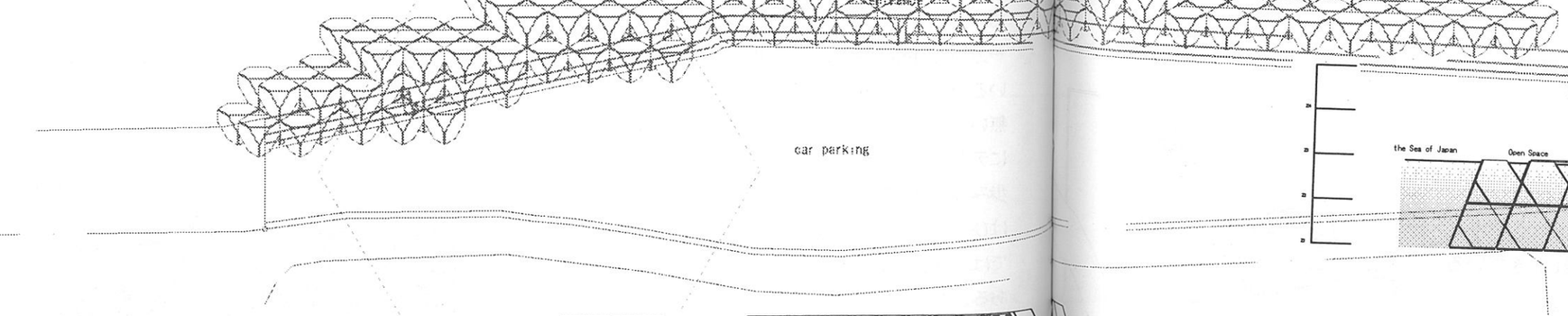
この空間は、もうすでに日常とは違う気圧をうんでいる。非日常の圧力を実感する。

打ち寄せる波に、巻き立つ気泡が訪れる人々の記憶を刻み込む。

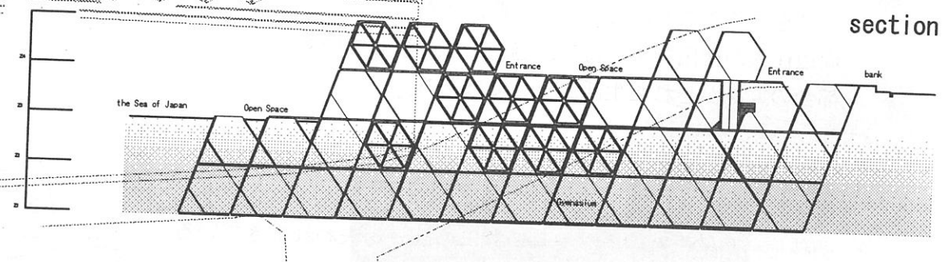
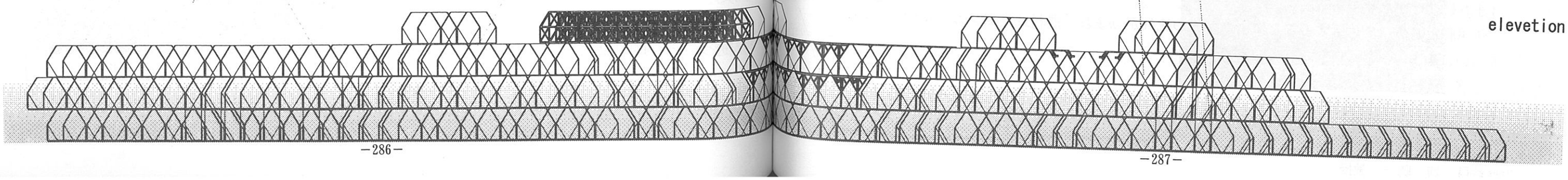
一瞬見えがかる、水を当たり前のように、通り過ぎしかし目の前に広がる海を目の当たりにすると、ここは海中であるということを再確認する。

生物本来の回遊性を導き出し、そこにとどまるということはなく、連続性がにじみだす、前へ進もうという意識がわく。

大空間に降り注ぐ、定期的な自然光が照らし出す無秩序な効果が姿を現す。



section



elevetion